

平成27年度

千葉県

袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書

ほり こみ
堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚

よこ た ごう
横田郷遺跡

うち こし きた うえ はら
打越北上原古墳群

みや の こし
宮ノ越貝塚

平成28年3月

袖ヶ浦市教育委員会

序 文

袖ヶ浦市は、東京湾沿岸部のほぼ中央に位置し、清澄山に端を発する小櫃川によって形成された平野部の田園地帯とその北側に広がる台地や丘陵、沿岸部の工業地帯からなります。そして、沿岸部周辺では宅地開発が進み、首都圏のベッドタウンとしても発展し、人口の増加とともに新たなまちづくりが進められて参りました。

また、近年には東京湾アクアラインや東関東自動車道館山線、圏央道が開通されるなど、広域幹線道路網の整備も進み、利便性が飛躍的に高まりました。そして、この整備された道路網を活かした袖ヶ浦駅海側特定土地区画整理事業、袖ヶ浦椎の森工業団地の整備などにより、本市は更なる発展を目指しております。

それに伴い市街地周辺では、遺跡が存在する範囲での開発行為も計画されます。このような計画が生じた際に本市では、遺跡を保護する観点から、国及び県の補助を受け、開発行為に先立ち発掘調査を実施し、失われる遺跡を記録しております。また、貝塚や古墳など市内の重要な遺跡に対する保存目的のための発掘調査も併せて実施し、遺跡の保存についても取り組んでいるところです。

本書は、これらの発掘調査成果を取りまとめたものですが、多くの市民の皆様に手にしていただき、埋蔵文化財への理解と関心を高めるとともに、かつて遺跡に生きた人々に、思いを馳せていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、千葉県教育庁教育振興部文化財課の方々には、発掘調査から本書の刊行に至るまでご指導を頂き、厚くお礼申し上げます。また、土地所有者及び関係者の皆様には、ご理解とご協力を頂きましたことに対しまして心から感謝申し上げます、刊行のあいさつといたします。

平成28年 3 月

袖ヶ浦市教育委員会
教育長 川 島 悟

例 言

1. この報告書は、平成 27 年度に発掘調査を実施した堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚、横田郷遺跡、打越北上原古墳群、宮ノ越貝塚を収録した平成 27 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、国庫・県費補助事業として千葉県教育委員会の指導を受け、発掘調査から整理作業・報告書刊行までの業務を袖ヶ浦市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び整理作業期間は、下記のとおりである。

堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚

平成 27 年 5 月 7 日～同年 6 月 8 日、平成 28 年 1 月 5 日～同年 2 月 1 日

横田郷遺跡

平成 27 年 11 月 17 日～同年 11 月 20 日、平成 28 年 1 月 12 日～同年 1 月 26 日

打越北上原古墳群

平成 28 年 1 月 26 日～同年 2 月 1 日、平成 28 年 2 月 2 日～同年 2 月 29 日

宮ノ越貝塚

平成 28 年 2 月 2 日～同年 2 月 17 日、平成 28 年 2 月 18 日～同年 2 月 26 日

4. 各遺跡の所在地は、下記のとおりである。

堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚

袖ヶ浦市神納字堀込 3,099- 1、2

横田郷遺跡

袖ヶ浦市横田字宿後 2,682- 1、2

打越北上原古墳群

袖ヶ浦市打越字北上原 360、366

宮ノ越貝塚

袖ヶ浦市下新田字未園崎 1,923

5. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成の担当者は、下記のとおりである。

堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚

発掘調査：大河原 務

整理作業・報告書作成：大河原 務

横田郷遺跡

発掘調査：大河原 務

整理作業・報告書作成：大河原 務

打越北上原古墳群

発掘調査：西原 崇浩・田中 大介

整理作業・報告書作成：西原 崇浩

宮ノ越貝塚

発掘調査：田中 大介・西原 崇浩

整理作業・報告書作成：田中 大介

前田 雅之・大河原 務

6. 本書の執筆者は、下記のとおりである。

序章・第 4 章 西原、第 2・3 章 大河原、第 5 章 田中

7. 報告書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第 1 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図 「奈良輪」「姉崎」「木更津」「上総横田」

第 8 図 袖ヶ浦市発行 1/2,500 地形図 「No.41」

第 13 図 袖ヶ浦市発行 1/2,500 地形図 「No.25」

8. 本書で使用したトレンチ名や遺構名は、基本的に発掘調査時のものを使用した。
9. 今回の調査に伴う遺物・記録類等は、袖ヶ浦市教育委員会で保管する予定である。
10. 各遺跡のコードは、堀込第 1 号塚（S G 117）・堀込第 2 号塚（S G 118）・堀込第 3 号塚（S G 119）、横田郷遺跡（S G 092）・打越北上原古墳群（S G 120）、宮ノ越貝塚（S G 121）である。
11. 調査から報告書刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々からご指導・ご協力をいただいた。また、現地での作業においては調査区の土地所有者各位のご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

目 次

序文

例言

序 章 調査概要	1	
1. 調査に至る経緯	2. 調査経過	3. 調査組織
第2章 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚	3	
1. 周辺の遺跡と環境	2. 調査と遺跡の概要	3. まとめ
第3章 横田郷遺跡	11	
1. 周辺の遺跡と環境	2. 調査と遺跡の概要	3. まとめ
第4章 打越北上原古墳群	13	
1. 周辺の遺跡と環境	2. 調査と遺跡の概要	3. まとめ
第5章 宮ノ越貝塚	20	
1. 周辺の遺跡と環境	2. 調査と遺跡の概要	3. まとめ

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡位置図
第2図 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚地形図
第3図 堀込第1号塚実測図
第4図 堀込第2号塚・第3号塚実測図
第5図 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚出土遺物実測図
第6図 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚墓石位置図
第7図 横田郷遺跡遺構確認状況図及び出土遺物実測図
第8図 打越北上原古墳群周辺地形図
第9図 打越北上原第3号墳地形図
第10図 打越北上原第3号墳遺構確認状況図
第11図 打越北上原第4号墳・第5号墳遺構確認状況図
第12図 打越北上原古墳群出土遺物実測図
第13図 宮ノ越貝塚周辺地形図
第14図 宮ノ越貝塚遺構確認状況図、調査範囲断面模式図、出土遺物実測図

表 目 次

表 1 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚出土遺物観察表

表 2 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚墓石観察表

図 版 目 次

図版 1 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚①

図版 2 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚②

図版 3 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚③

図版 4 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚④

図版 5 掘込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚⑤

図版 6 横田郷遺跡

図版 7 打越北上原古墳群①

図版 8 打越北上原古墳群②

図版 9 宮ノ越貝塚①

図版 10 宮ノ越貝塚②

序章 調査概要

1. 調査に至る経緯

袖ヶ浦市教育委員会では、市内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地内において計画される中小企業等の開発行為に際して、遺跡の実態を把握するための確認調査や、個人住宅建築及び個人農地造成に際して、本調査を実施するため、国及び県の補助を受けている。また、重要な遺跡の保存目的の範囲確認調査についても補助を受けて実施している。

平成 27 年度は、次の 4 件についての調査から報告書刊行までを実施した。

- 1 堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚（本調査）…… 個人農地造成に伴う調査
- 2 横田郷遺跡（確認調査）…… 個人住宅建築に伴う調査
- 3 打越北上原古墳群（確認調査）…… 保存目的の範囲確認に伴う調査
- 4 宮ノ越貝塚（確認調査）…… 保存目的の範囲確認に伴う調査

2. 調査経過

堀込第 1 号塚・第 2 号塚・第 3 号塚

5 月 7 日：機材搬入、環境整備、仮設トイレ設置、塚盛土測量、写真撮影 8 日：塚盛土測量、写真撮影、塚盛土掘り下げ 11 日：塚盛土測量 12 日：塚盛土掘り下げ 13 日：塚盛土掘り下げ 14 日：塚盛土掘り下げ 15 日：塚盛土掘り下げ 18 日：塚盛土掘り下げ 19 日：雨天作業中止 20 日：塚盛土掘り下げ、人骨埋葬土坑精査及び人骨取り上げ 21 日：塚盛土掘り下げ、人骨埋葬土坑精査及び人骨取り上げ 22 日：塚盛土掘り下げ、塚盛土断面実測 25 日：塚盛土掘り下げ、写真撮影 26 日：塚盛土掘り下げ、人骨取り上げ 27 日：塚盛土掘り下げ、塚盛土断面実測 28 日：塚盛土断面実測、写真撮影 29 日：塚盛土掘り下げ 6 月 1 日：平面実測、塚盛土断面実測、写真撮影 3～5 日：現場作業中止 8 日：重機による埋戻し、重機搬入・搬出、環境整備、機材搬出、仮設トイレ撤去

横田郷遺跡

11 月 17 日 機材搬入、環境整備、仮設トイレ設置、重機搬入、重機によるトレンチ掘削、基準点測量 18 日：遺構確認 19 日：平面・断面実測、写真撮影 20 日：断面実測、写真撮影、重機による埋戻し、重機搬出、環境整備、機材搬出、仮設トイレ撤去

打越北上原古墳群

1 月 26 日：機材搬入、環境整備、重機搬入、重機及び人力によるトレンチ掘削、遺構確認、写真撮影 27 日：トレンチ掘削、遺構確認、平面・断面実測、写真撮影 28 日：平面・断面実測、写真撮影、測量 29 日：雨天作業中止 2 月 1 日：平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、重機搬出、環境整備、機材搬出

宮ノ越貝塚

2 月 2 日：基準点測量 3 日：写真撮影 4 日：機材搬入、草刈、環境整備、仮設トイレ設置 5 日：重機搬入、重機によるトレンチ掘削、遺構確認 8 日：遺構確認、平面実測、写真撮影 9 日：遺構確認、写真撮影 10 日：遺構確認、写真撮影 12 日：遺構確認、写真撮影 15 日：平面実測、写真撮影 16 日：平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、重機搬出 17 日：環境整備、機材搬出、仮設トイレ撤去

3. 調査組織

調査主体 袖ヶ浦市教育委員会

教 育 長	川島 悟	教育部長	鈴木 和博
教育部次長	森田 泰弘	教育部参事兼生涯学習課長	原田 光雄
生涯学習課文化振興班			
副課長兼文化振興班長	西原 崇浩	副 主 査	田中 大介
副 主 査	前田 雅之	主任主事	大河原 務



第1図 調査遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)

第2章 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚

1. 周辺の遺跡と環境

堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚は小櫃川下流域右岸の標高約30mの台地上に位置する。遺跡が立地する台地上には鼻欠遺跡、堀込遺跡、中辻台遺跡、谷ノ台遺跡など旧石器時代から近世にかけての遺跡が立地し、中辻台遺跡や谷ノ台遺跡には近世の塚も構築されている。

2. 調査と遺跡の概要（第2～6図、図版1～5）

第1号塚

1 平面 方形

2 状況 堀込第1号塚として周知される。現況は東西に長い楕円形を呈するが、塚の北部を宅地整備、西部を農地造成、南部を東部に位置する農地への通り道として改変されており、本来の形状は損なわれているものと思われる。周辺には12基の墓石が並ぶ。墓石の年代は年号が確認できるもので、1670年～1843年にかけてのものである。塚北西部から南部にかけての墓石は直下に土坑を確認することはできず、南東部からは宝永火山灰を含む土層堆積以降に作られた墓と思われる土坑が確認された。しかし、この土坑は現在設置されている墓石の数と比べると少ない。これらのことから、現在設置されている墓石は、本来塚の周辺にあったものが塚周辺の別地点に移設されたものと、まったくの別地点に設置されていたものが移設されたものである可能性が高い。

3 構造 塚南東部において、周溝が検出され、周溝外縁はほとんど確認できなかったが、内縁は旧表土面を方形に削り出して、基壇を造作している。周溝は1.2～1.3m幅で、深さ0.15mを測る。前述のとおり本来の形状が損なわれているため、南東部以外からは周溝を確認することはできなかった。盛土は旧表土面から約1.6mの高さまで行われている。塚東部には約0.3mの土手状の盛土が確認でき、中心部の盛土の流出を防いでいたものと思われる。盛土は、旧表土面の整形、1段目の水平の盛土、埋葬施設の造成、縁部に土手状の盛土、塚中心部から外部方向へ向けての盛土、水平の盛土の工程で行われたものと推測される。盛土構築土は、ローム粒、ロームブロックが混入する黒褐色土が主体となることから、塚構築時に周辺を整形した際に出た土を利用していたものと思われる。周溝上の堆積土より、宝永火山灰を含む土層が検出された。

4 規模 基壇で南北軸5.4m以上、東西軸5.6m以上、現況で南北軸7.95m、東西軸8.09mを測る。

5 埋葬施設 規模は長軸1.12m、短軸1.05mの円形を呈し、深さ0.67mを測る。埋葬姿勢が屈葬であることから座棺と思われるが、棺の痕跡は確認できなかった。頭部は北部を向く。

6 出土遺物 銭貨（1～6）、焼塩壺蓋（7）、土錘、かわらけ、陶器椀（8～12）、油皿（13）、磁器椀（14～16）、小杯（17）が出土した。銭貨は寛永通宝文銭であり、埋葬施設内底面より重なって出土した。六道銭と思われる。7は江戸近郊在地系であり、刻印は確認できなかった。盛土上層より出土しており、塚に伴うものか、塚構築時に混入したものか、塚構築以降のものかは不明である。その他は表土からの出土である。陶磁器の出土位置は塚の西部から南部にかけてであり、塚周辺に並ぶ墓石の位置と一致する。陶器は瀬戸・美濃系、萩系、磁器は瀬戸系、肥前系、美濃系のものがあり、おおむね18世紀後半～19世紀半ばのものである。

第2号塚

1 平面 円形

2 状況 掘込第2号塚として周知される。現況は円形を呈する。塚南部は樹木により破壊されている。塚の周辺には7基の墓石が並ぶ。墓石の年代は年号が確認できるもので、1698年～1852年にかけてのものである。墓石の直下に土坑を確認することはできず、基礎がないものもあることから、別地点に設置されていたものが現在地に移設された可能性が高い。

3 構造 旧表土面を円形に削り出して、基壇を造作し、その上に約0.9mの高さまで盛土を行っている。盛土は、旧表土面の整形、1段目の盛土、埋葬施設の造成、整形の盛土の工程で行われたものと推測される。盛土構築土は、黒褐色土が主体となることから、塚構築時に周辺を整形した際に出た土を利用していたものと思われる。塚構築以降の堆積土より、宝永火山灰を含む土層が検出された。

4 規模 基壇で南北軸2.3m以上、東西軸3.64m、現況で南北軸4.96m、東西軸4.06mを測る。

5 埋葬施設 規模は長軸0.84m、短軸0.81mの円形を呈し、深さ0.67mを測る。頭蓋骨と思われる骨片のみの出土であり、埋葬施設内において棺の痕跡は確認できなかった。

6 出土遺物 焼塩壺(1)、かわらけ、陶器碗(2)、徳利(3)、油受皿(4)、磁器碗が出土した。すべて表土からの出土である。1は江戸近郊在地系であり、刻印は確認できなかった。陶磁器は北部墓石周辺からの出土である。おおむね18世紀後半～19世紀半ばにかけてのものである。

第3号塚

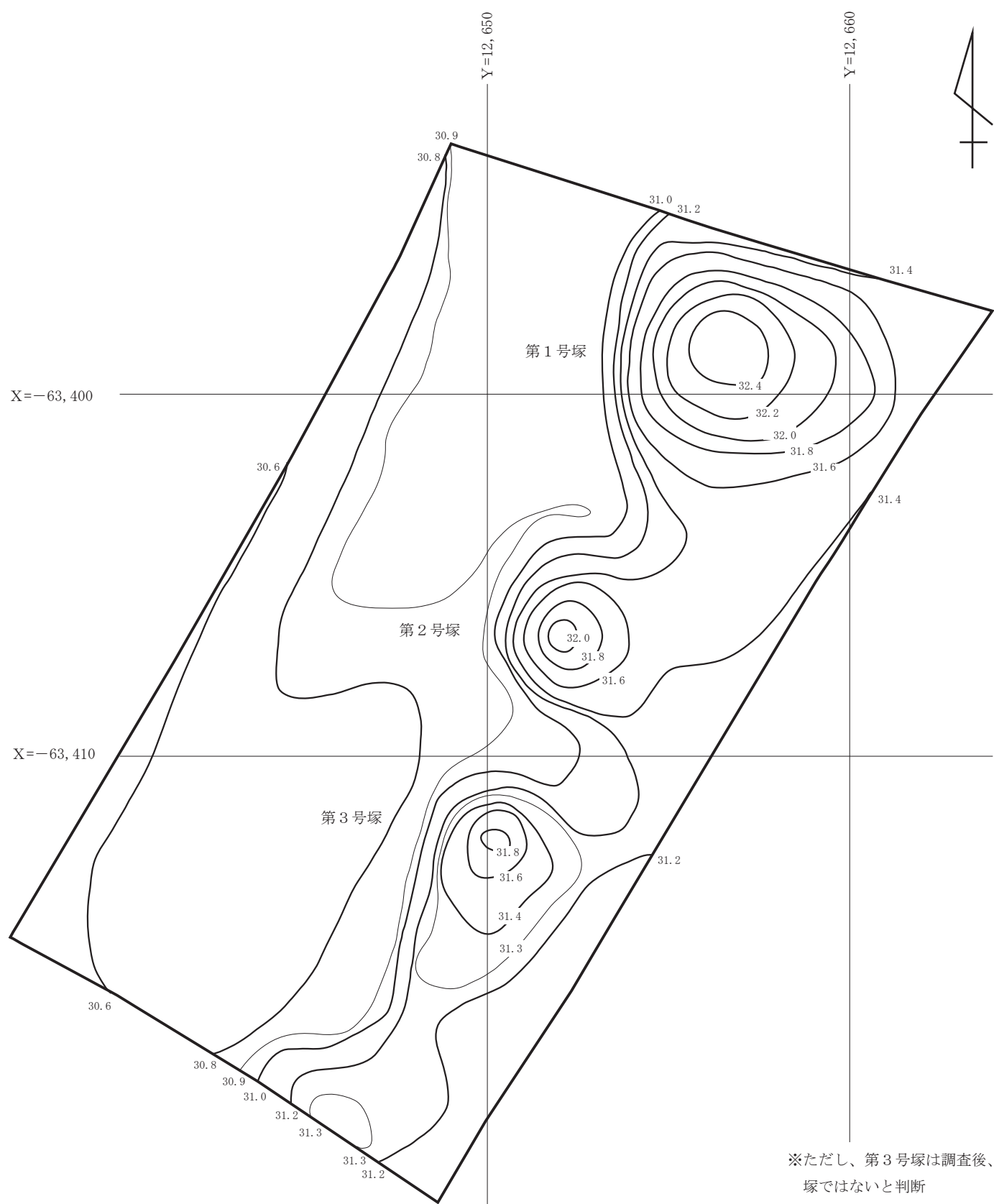
1 状況 掘込第3号塚として周知される。塚の周辺には11基の墓石が並ぶ。墓石の年代は年号が確認できるもので、1718年～1877年にかけてのものである。墓石の直下に土坑が確認できるものはなく、別地点に設置されていたものが現在地に移設された可能性が高い。

2 盛土 現況は北部から南部に向けて緩やかに傾斜している。塚を構築したと思われるような意図的な盛土の堆積は見られなかった。調査区西側は過去に畑であり、現在の東側よりも標高が低くなっている。農地造成を行った際に発生した掘削土を積み上げた場所の可能性があるが、塚ではないと判断した。盛土下からは宝永火山灰を含む土層堆積以降に作られた墓と思われる土坑が検出された。

3 出土遺物 陶器碗(1)、小杯(2)、徳利、磁器花器が出土した。すべて表土からの出土である。2は瀬戸・美濃系の陶胎染付であり、18世紀以前のものであると思われる。

3. まとめ

調査の結果、掘込第1号塚・第2号塚は塚墓であり、第3号塚は塚ではないことが判明した。第1号塚と第2号塚では平面形、規模が異なる。年代の違いや被葬者の身分の違いなどが想定できるが、両塚とも伴う出土遺物がほとんどないため不明である。両塚とも旧表土面を整形した際に出た土を利用して盛土を行ったものと想定される。第1号塚では基壇縁部に土手状の盛土が確認できるが、第2号塚では同様の土手状盛土は確認できなかった。規模の差や、被葬者の差異による可能性もある。両塚とも宝永火山灰が塚構築以降に堆積し、第1号塚埋葬施設からは寛永通宝文銭が出土した。そのため、第1号塚の構築年代は、寛永通宝文銭の鑄造が開始された1668年から宝永の噴火があった1707年の間と推定できる。塚の周辺からは近世陶磁器が出土しているが、塚の構築年代とは異なるため、周辺に設置された墓石に伴うものと思われる。



第2図 掘込第1号塚・第2号塚・第3号塚地形図 (S = 1 / 150)

第1号塚

1 ~ 6

A

B

A'

B'

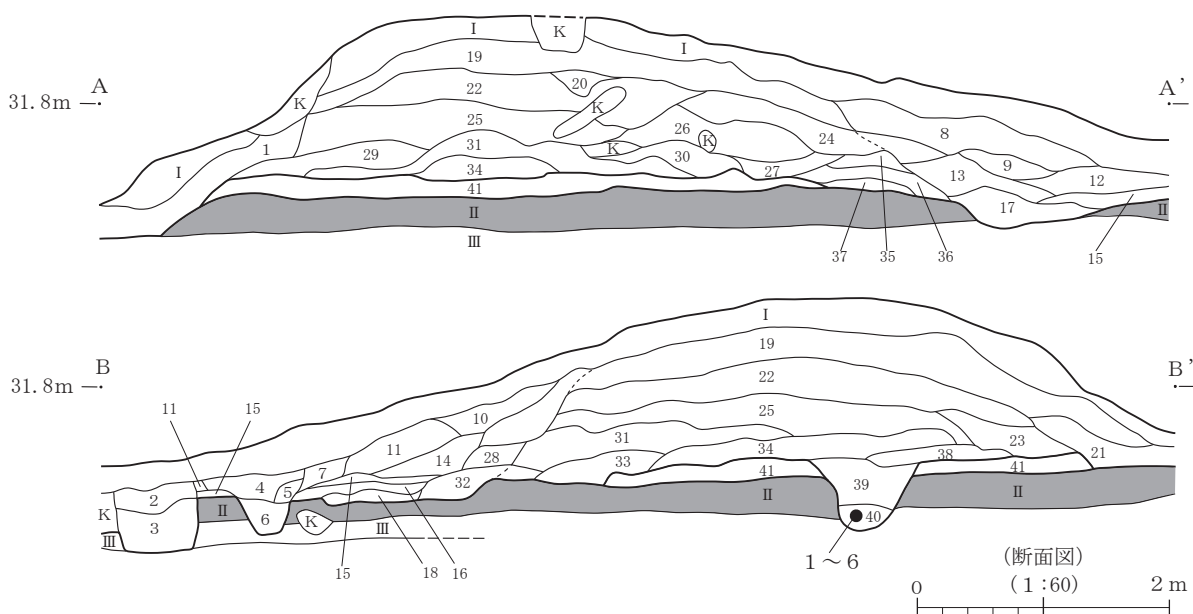
X=-63,400

Y=12,660

(平面図)

(1:80)

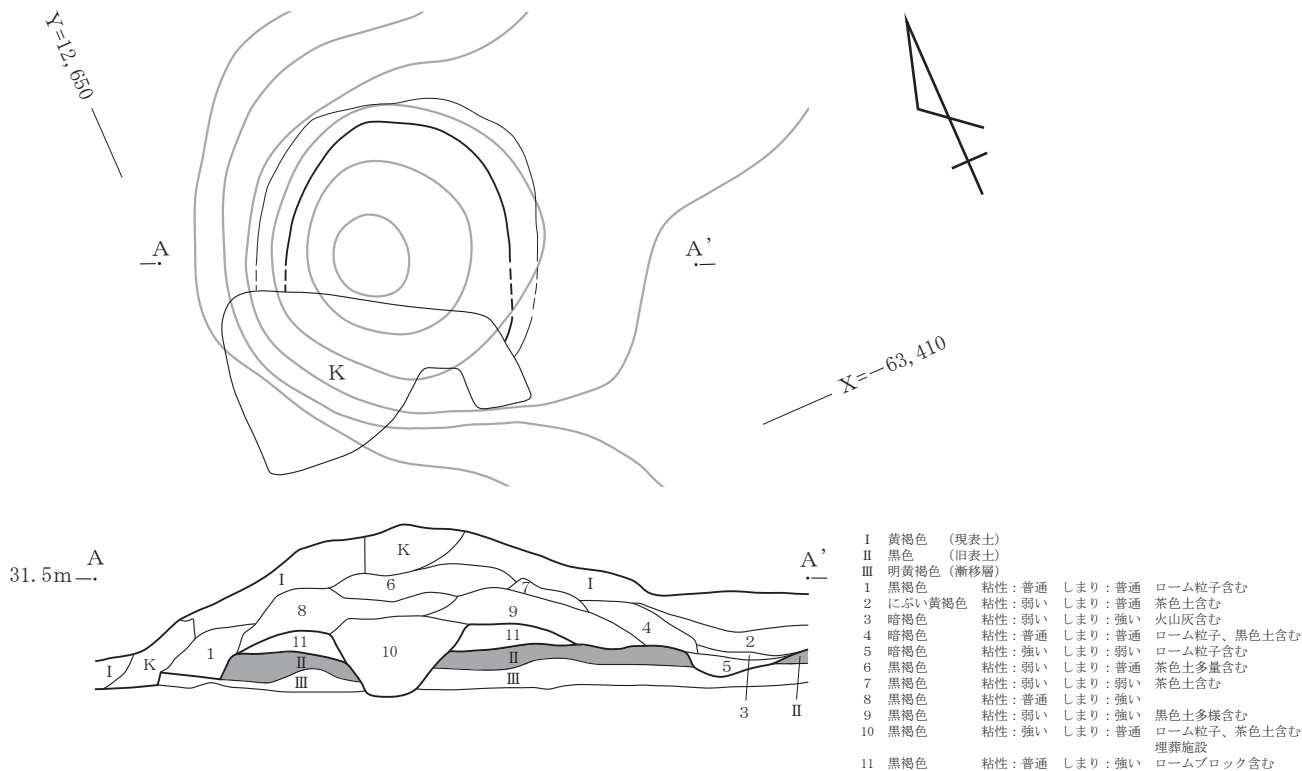
0 4 m



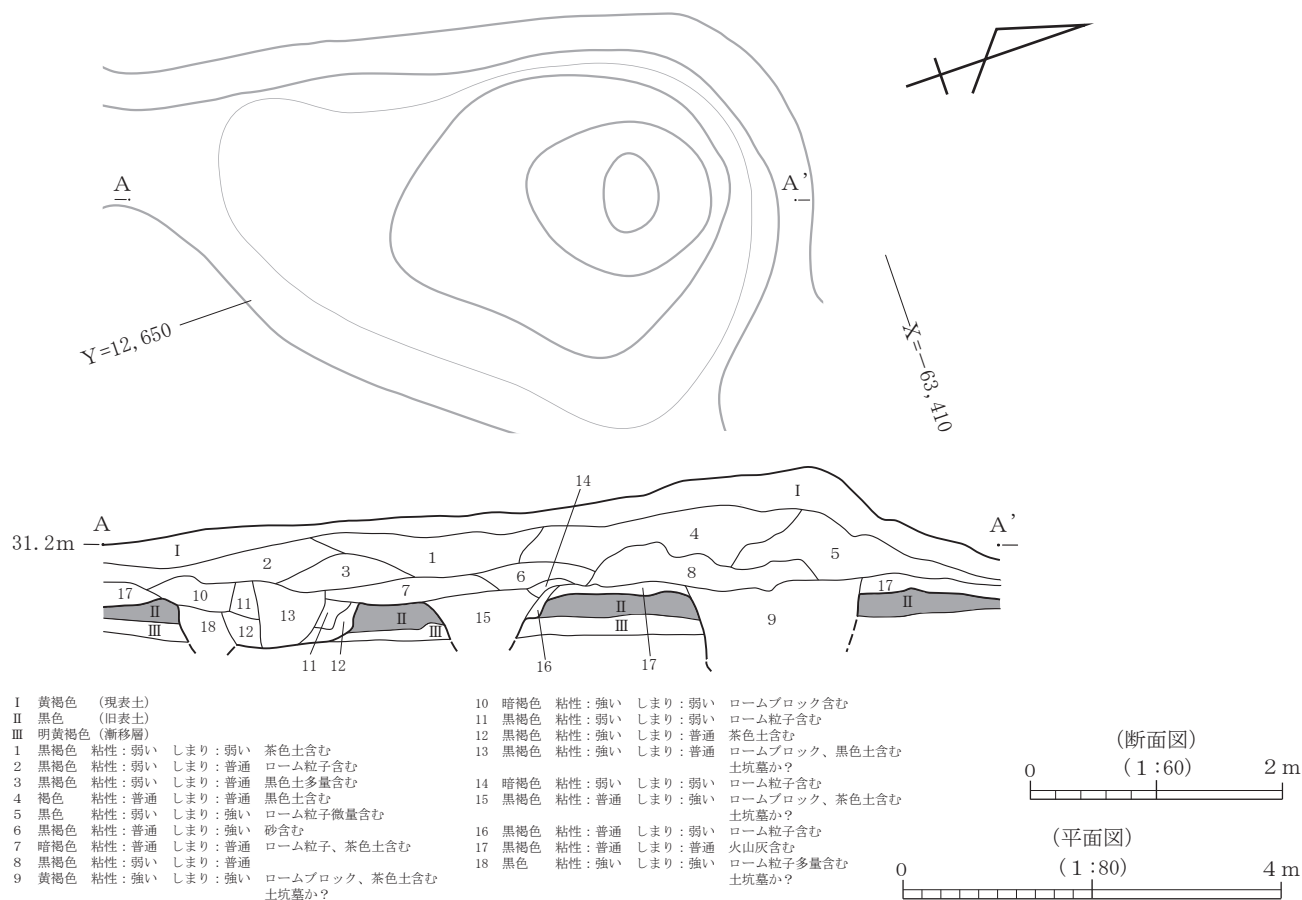
I	黄褐色	(現表土)			20	黒色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子含む
II	黒色	(旧表土)			21	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	茶褐色土含む
III	黄褐色	(漸移層)			22	褐色	粘性: 弱い	しまり: 普通	黒色土含む
1	黒褐色	粘性: 普通	しまり: 弱い	耕作土か?	23	暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	黒色土含む
2	暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子含む	24	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子含む
3	黄褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ロームブロック含む	25	黒色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	茶褐色土含む
4	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子多量含む	26	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 強い	
5	黄褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子含む	27	黒色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子含む
6	黄褐色	粘性: 強い	しまり: 普通	黒色土含む	28	褐色	粘性: 普通	しまり: 普通	黒色土含む
7	にぶい黄褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子、茶褐色土含む	29	黒褐色	粘性: 普通	しまり: 強い	黒色土含む
8	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子多量含む	30	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子、黒色土含む
9	暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子多量含む	31	黒色	粘性: 普通	しまり: 普通	
10	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	茶褐色土含む	32	黒褐色	粘性: 普通	しまり: 強い	ローム粒子含む
11	暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	ローム粒子多量含む	33	黒褐色	粘性: 強い	しまり: 強い	ローム粒子含む
12	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い		34	黒色	粘性: 普通	しまり: 弱い	ローム粒子含む
13	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 普通	ローム粒子含む	35	にぶい黄褐色	粘性: 普通	しまり: 弱い	黒色土含む
14	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 普通	茶褐色土含む	36	にぶい黄褐色	粘性: 普通	しまり: 普通	
15	極暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 弱い	火山灰含む	37	灰黄褐色	粘性: 普通	しまり: 普通	
16	黒褐色	粘性: 強い	しまり: 普通	ローム粒子含む	38	黒褐色	粘性: 弱い	しまり: 強い	ローム粒子含む
17	黒色	粘性: 強い	しまり: 普通	ローム粒子含む	39	黒色	粘性: 強い	しまり: 強い	暗褐色土含む 埋葬施設
18	にぶい黄褐色	粘性: 強い	しまり: 普通	黒色土含む	40	暗褐色	粘性: 強い	しまり: 強い	ローム粒子含む 埋葬施設
19	暗褐色	粘性: 弱い	しまり: 普通	ロームブロック含む	41	灰黄褐	粘性: 普通	しまり: 普通	

— 6 —

第2号塚

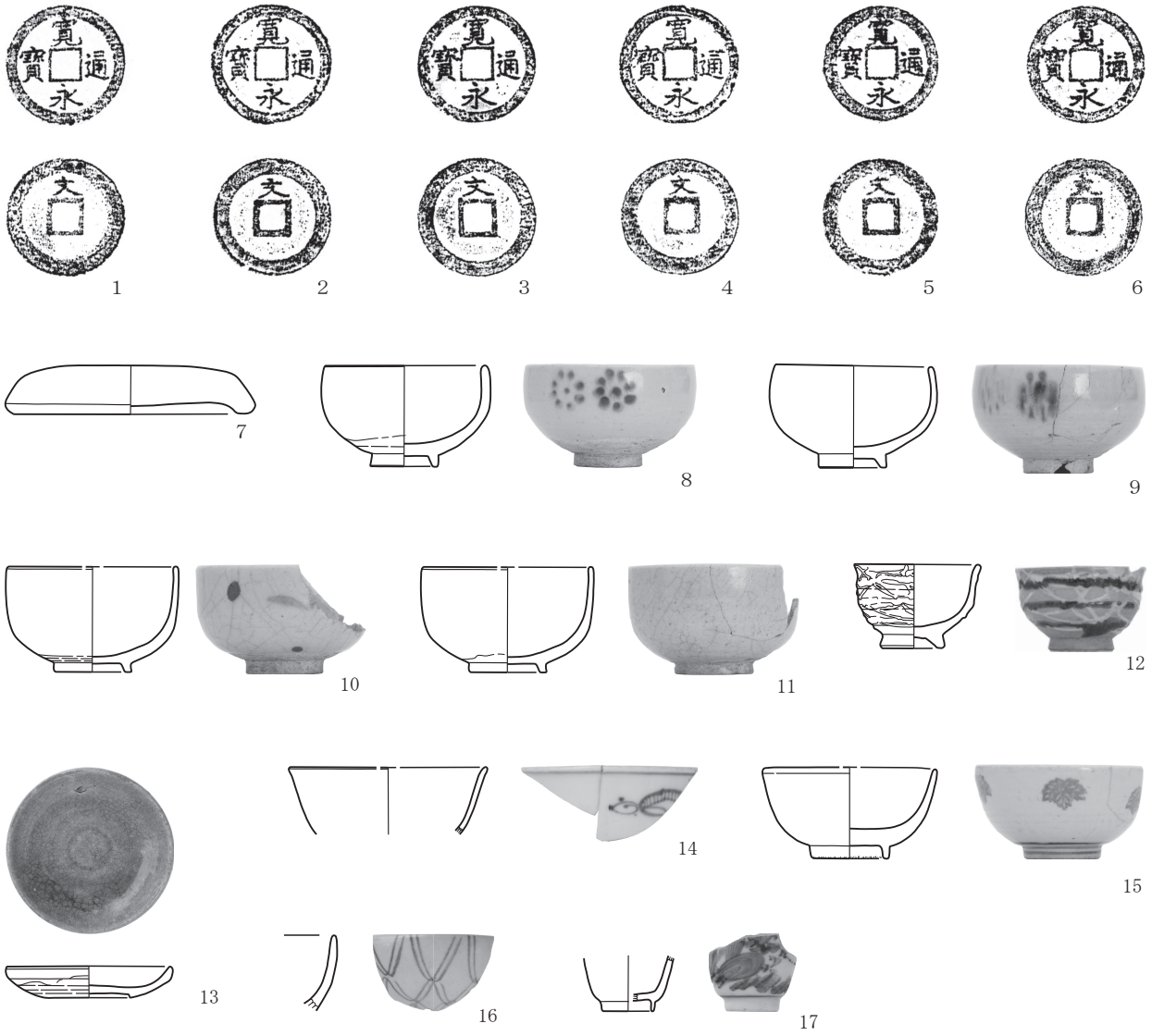


第3号塚

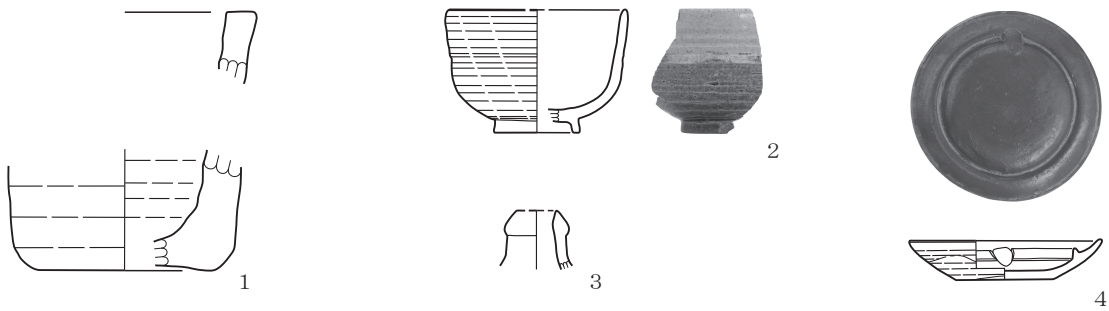


第4図 掘込第2号塚・第3号塚実測図

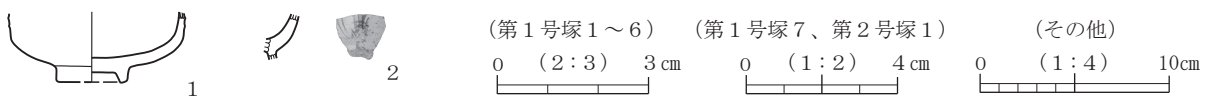
第1号塚



第2号塚



第3号塚

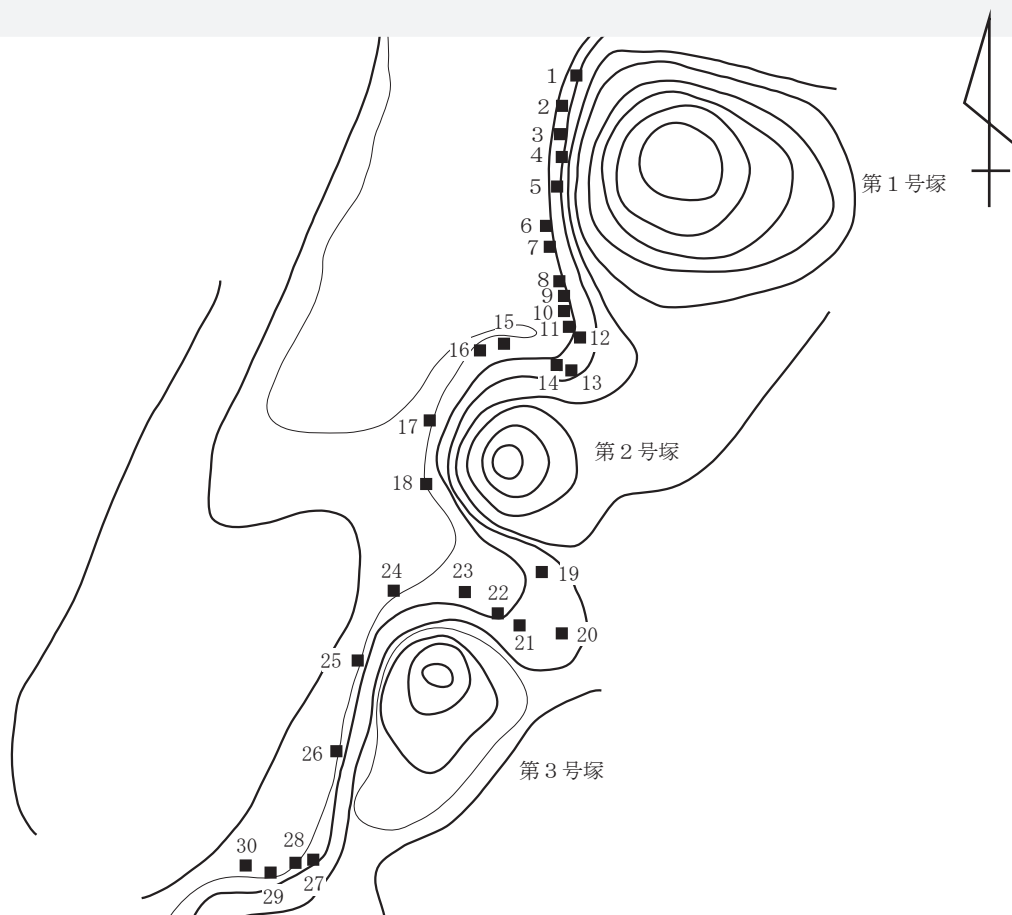


第5図 堀込第1号塚・第2号塚・第3号塚出土遺物実測図

表1 掘込第1号塚・第2号塚・第3号塚出土遺物観察表

遺構	遺物 番号	器種	産地	遺存率	法量 (cm)	時期	備考
第1号塚	1	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	2	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	3	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	4	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	5	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	6	銭貨	-	完形	2.5	1668～	寛永通宝文銭
第1号塚	7	焼塩壺	江戸近郊在地系	完形	7.1×1.4	19c前～19c中	蓋
第1号塚	8	陶器碗	瀬戸・美濃系	完形	9.3×3.9×5.8	18c後～19c中	青緑色釉による八弁花の草花文が2つ 内面全体、外面体部に灰釉および貫入 長の碗
第1号塚	9	陶器碗	瀬戸・美濃系	完形	9.0×3.9×5.9	18c後～19c中	青緑色釉による八弁花の草花文が2つ 内面全体、外面体部に灰釉および貫入 長の碗
第1号塚	10	陶器碗	瀬戸・美濃系	胴部60% 底部100%	9.7×4.3×5.9	18c後～19c中	青緑色釉による草花文 内面全体、外面体部に灰釉および貫入
第1号塚	11	陶器碗	瀬戸・美濃系	胴部40% 底部100%	9.7×4.5×6.1	18c後～19c中	青緑色釉による草花文 内面全体、外面体部に灰釉および貫入
第1号塚	12	陶器碗	萩系	完形	7.3×3.6×4.8	19c前～19c中	内面長石釉 外面体部に鉄釉と長石釉の縞模様 (イッチン描)
第1号塚	13	陶器油皿	瀬戸・美濃系	完形	9.6×4.7×1.9	18c後～19c中	内面全体、外面体部に灰釉 基筋底
第1号塚	14	磁器碗	瀬戸系	口縁部40%	10.8×-×3.7～	19c前～19c中	端反り碗 文様不明
第1号塚	15	磁器碗	肥前系	50%	10.0×4.4×5.2	18c後～19c前	畳付は砂目
第1号塚	16	磁器碗	肥前系	口縁部30%	9.6×-×3.2～	18c後～19c前	内外面に網目文
第1号塚	17	磁器小杯	美濃系	胴部30%	-×3.0×3.1～	19c後	
第2号塚	1	焼塩壺	江戸近郊在地系	口縁部破片 底部30%	-×4.6×3.2～	江戸後半	
第2号塚	2	陶器碗	瀬戸・美濃系	30%	9.2×4.1×6.5	18c後～19c前	掛分け碗 内面全面、外面体部上半に灰釉 体部下半から底部、畳付内部に鉄釉
第2号塚	3	陶器徳利	瀬戸・美濃系	口縁部40%	2.3×-×3.1～	19c前～19c中	貧乏徳利 灰釉
第2号塚	4	陶器油受皿	瀬戸・美濃系	完形	10.2×5.2×2.1	19c前～19c中	底部釉に一部拭き取り痕あり
第3号塚	1	陶器碗	瀬戸・美濃系	胴部20% 底部100%	-×3.7×3.7～	18c後～19c前	掛分け碗 内面全面、外面体部上半に灰 体部下半から底部、畳付内部に鉄釉 畳付も鉄釉か?
第3号塚	2	陶器小杯	瀬戸・美濃系	破片	-	18c以前	陶胎染付

※法量：(銭 貨) 直径
(焼塩壺蓋) 口径×器高
(そ の 他) 口径×底径×器高



第6図 掘込第1号塚・第2号塚・第3号塚墓石位置図 (S = 1 / 200)

表2 掘込第1号塚・第2号塚・第3号塚墓石観察表

番号	種類	略測値 (cm) (縦×横×高さ)	銘文時期 (西暦)	銘文
1	板碑型	24×37×86	承応3年? (1654?)	(正面右) 承...三午年 (正面中央) ■清信女 ■信士 (正面左) 二月十日
2	光背型	28×44×104	寛文10年 (1670) ?年 (-)	(正面右) 浄法■禪定門靈位 寛文十年■十月十一日 (正面左) 妙善禪定尼胎位 ■■■午■九月十七日
3	光背型	23×23×56	元禄15年 (1702)	(正面右) 不産■性信女靈位 (正面左) 元禄十五壬午■■■■三月十六日
4	光背型	24×43×81	延宝8年 (1680)	(正面右) ■喜信士吳位 (正面左) 延宝八庚申六月十四■
5	光背型	31×34×84	元禄4年 (1691)	(正面右) 浮雲■信士吳位 (正面左) 元禄四年■未六月三日■位
6	光背型	8×17×29	享保?年 (-)	(正面右) ■心童子 (正面左) 享保■■■
7	光背型	14×27×49	享保2年 (1717)	(正面右) 法■信女 (正面左) 享保二年十一月一日
8	箱型	14×24×58	天保14年 (1843)	(右面) 天保十四卯年 (正面) 梅雲妙林信女 (左面) 十二月五日
9	光背型	20×32×53	享保12年 (1727)	(正面右) 得不信士靈 (正面左) 享保十二■戌九月二日
10	箱型	14×24×52	文政4年 (1821)	(右面) 文政四年天 (正面) 榮樹道芳信士 (左面) 九月二十一■
11	箱型	12×23×53	?年 (-)	(正面右) ■...天 (正面中央) ■...信士 (正面左) ■...三日
12	光背型	17×27×48	?年 (-)	(正面右) 雪■證心信女靈 (正面左) ■...天十二月二十日
13	箱型	14×23×50	天明5年 (1785) 文化11年 (1814)	(右面) 天明五巳■■■月四日 (正面右) 空月妙春信女 (正面左) ■■韓光信女 位 (左面) 文化十一戌五月■■二日
14	光背型	15×26×46	安永3年 (1774)	(正面右) 幾玄童女■位 (正面左) 安永三年六月二十二日
15	光背型	18×32×76	元禄13年 (1700)	(正面右) 雲了空心信士靈位 (正面左) 元禄十三年辰六月十六日
16	箱型	14×24×52	安永5年 (1776)	(正面右) 安永五申天 (正面中央) 普遍貞光信士靈 (正面左) 五月七日
17	光背型	28×40×95	元禄11年 (1698)	(正面右) 壽榮■運信士靈位 (正面左) 元禄十一戌寅天十月二十六日
18	光背型	7×17×27	享保12年 (1727)	(正面右) ■■童子 (正面左) 享保十二■午九月十九日
19	山状角柱	17×22×54	嘉永5年 (1852)	(右面) 行年六十三 (正面右) 嘉永五壬子年 (正面中央) 梅雪明寒成■信士■ (正面左) 十二月三日 (左面) ■■■新■
20	箱型	13×21×54	文久2年 (1862)	(正面右) 文久二戌星 (正面中央) 法成院■海明到信女 (正面左) 十月五日
21	箱型	12×24×58	宝暦12年 (1762)	(正面右) 宝暦十二壬午 (正面中央) 法雲了覺信士靈 (正面左) 九月八日 (左面) 行年七十二
22	山状角柱	17×24×56	明治10年 (1877)	(正面右) 明治十丑年 (正面中央) 到岸院一阿明道信士位 (正面左) 十二月二十四日 (左面右) ■野佐吉 (左面左) 行年六十■
23	箱型	15×24×55	安政4年 (1857)	(正面右) 安政四年 (正面中央) 青葉妙來信女位 (正面左) 五月十九日 (左面右) 俗名 (左面中央) みよ (左面左) 年四十四
24	光背型	17×28×48	享保6年 (1721)	(正面右) 單到妙善信女 (正面左) 享保六丑七月十一日
25	光背型	18×33×54	享保3年 (1718)	(正面右) 常觀受貞信士 (正面左) 享保三戌戌七月二十三日
26	箱型	12×23×55	明治8年 (1875)	(正面) 光阿明傳信士 (右面) 明治八亥七月十日 (左面右) 新田篠田■助出 (左面左) 俗名銀藏
27	箱型	13×24×58	明和8年 (1771)	(正面右) 明和八卯天■■■ (正面中央) 本如妙實■■■ (正面左) 九月六日
28	角柱	15×23×55	明治?年 (-)	(右面) 明治四■年■■■ (正面) 空恵■性信士吳 (左面) 行年三十八
29	箱型	13×23×54	安永4年? (1775?)	(正面右) 安永四■天 (正面中央) ■月妙心信女 (正面左) ■月四日
30	光背型	16×20×36	享保5年 (1720)	(正面右) 放金童子■ (正面左) 享保五子六月十九日

第3章 横田郷遺跡

1. 周辺の遺跡と環境

横田郷遺跡は、小櫃川中流域右岸の標高約 14 m の自然堤防と後背湿地の境界付近に立地する。本遺跡一角は中世以降に開発が顕著となった荘園であり、本調査区の南西約 500 m の位置に中世の小坪館跡と伝えられる場所があり、政治的な中核を占める一画と考えられている。過去の調査において、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が展開していたことがわかっており、中世以降の遺構では、中世以降の溝多数と井戸 1 基、近世以前の水田面が検出された。周辺の遺跡では、中世の舶載陶器片や畦畔が検出された横田小路遺跡や、近世以前の水田面と畦畔が検出された稲荷台遺跡が立地する。

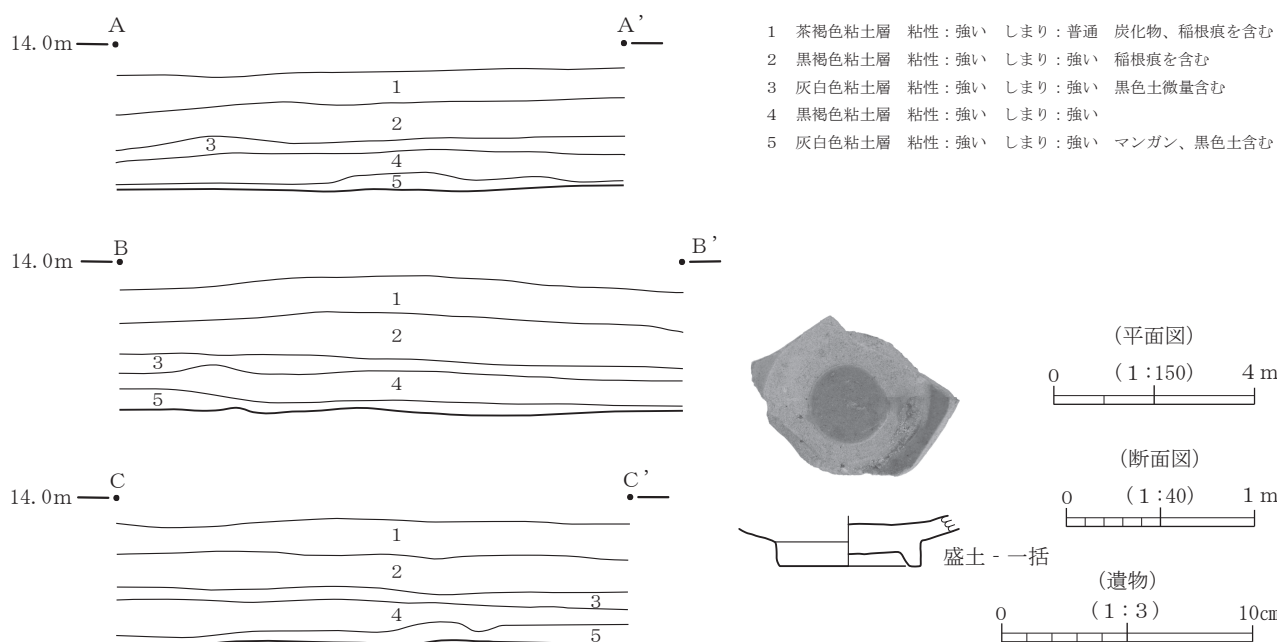
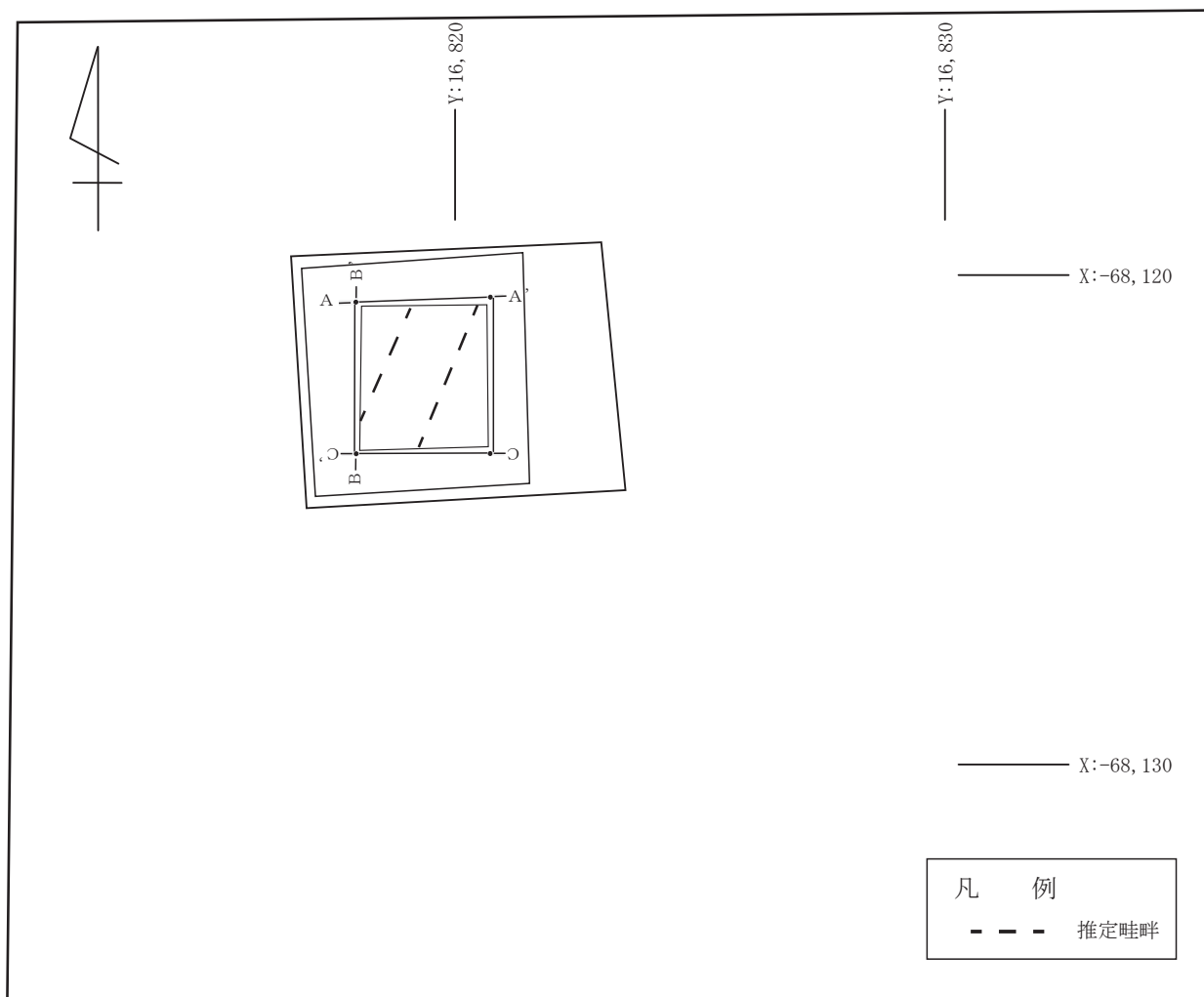
2. 調査と遺跡の概要（第7図、図版6）

調査方法 調査は、個人住宅建設に伴うもので、86.1224m²を調査対象として実施した。事業計画を踏まえ、トレンチは、調査対象地の北西部に 6.5 m × 5 m の規模で設定した。現表土面下の盛土掘削後に、さらに 3 m × 3 m の規模で掘り下げを行った。調査区の現状は更地である。トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。

遺構・遺物 現表土面から約 1 m 盛土され、盛土下には茶褐色粘土層が堆積する。茶褐色粘土層からは炭化物や稲根痕が検出され、本調査区に隣接する水田面と同じ標高であることから、盛土以前の水田面と判断した。茶褐色粘土層下には、小櫃川の洪水などで堆積した灰白色粘土層と泥炭層が変化した黒褐色粘土層が相互に堆積する。トレンチ北・南・西面の盛土下約 0.6 m に堆積する灰白色粘土層から、堤上の盛り上がりを確認することができた。同層はマンガン等が確認できることから水田としての利用が推測され、この堤上の盛り上がりを畦畔と判断した。畦畔は N -25° - E 軸に延び、幅は 1.1 m である。調査対象地の北東部を試掘した際にも、北東－南西軸、幅 1.0 m の灰白色粘土層の堤状の盛り上がりが確認され、本トレンチから検出した畦畔と類似する。遺構に伴う遺物は無く、周辺での調査例も乏しいために時期については不明だが、掘削深度から近世以前が想定される。遺物は、盛土下層より陶器鉢が出土した。底径 4.2cm、残存高 1.5cm の青緑色の釉が施された蛇の目釉剥ぎの鉢である。底部のみのため、時期は不明である。

3. まとめ

本調査及び試掘の結果より、本調査区周辺より北東－南西軸に延びる畦畔が 2 条検出された。本遺跡周辺は、中世以降より調査区南部の小櫃川によって形成された自然堤防上の北斜面から調査区北部の後背低地に展開する条里水田内に位置していることわかっている。近隣の遺跡においても、近世から中世の水田及び畦畔が検出されており、数面にわたって水田経営がされていたことが推測できる。本調査においては、水田面及び畦畔の存在を明らかにすることができたが、伴う遺物が出土しなかったため、明確な時期は判断することができなかった。



第7図 横田郷遺跡遺構確認状況図及び出土遺物実測図

第4章 打越北上原古墳群

1. 周辺の遺跡と環境（第8図）

打越北上原古墳群は、小櫃川を眼下に望む標高40～50mの台地縁辺部に位置する。本古墳群が位置する小櫃川中～下流域にかけての台地には、多くの古墳群が造営されている。一部調査により古墳群の内容が把握されているが、その多くは未調査のまま保存されている。周辺の古墳群のうち、椿古墳群、馬場作古墳群、上谷田古墳群、大作A・B古墳群、鬼塚古墳群、大作古墳群、滝ノ口向台古墳群、大竹古墳群などの調査成果から、古墳時代後期の古墳は小櫃川に面する台地縁辺部周辺、前～中期の古墳は、やや奥まった台地上や尾根上に構築される傾向が窺える。また、椿古墳群、上谷田古墳群の他、打越北上原古墳群に近接する谷畑古墳群や下根岸古墳群では、本古墳群と同様に1～2基程度の前方後円墳を擁する。

打越北上原古墳群は、北側へ延びる舌状台地の先端部とそこから短い馬の背状の尾根を介して西に延びる台地上に立地する。西側には前方後円墳1基と円墳2基が存在していることが知られていたが、平成22年度に実施した緊急雇用創出事業による打越砦の地形測量の結果、前方後円墳1基と円墳3基が良好な状態で遺存していることが明らかとなった。東側の舌状台地先端部には前方後円墳1基と円墳3基が構築されている。

今回実施した保存目的の範囲確認調査は、東側の舌状台地に立地する前方後円墳の第3号墳と第4号墳・第5号墳の円墳2基を対象として実施した。本古墳群の現状は、種苗育場の畑地として利用されている。

2. 調査と遺跡の概要（第9～12図、図版7・8）

調査目的 打越北上原第3号墳は、墳丘の保存状態が良好で、本市では数少ない前方後円墳であることから、昭和59年2月15日付けで袖ヶ浦町指定文化財に指定され、保護されてきた。本古墳の調査は、古くは戦後直後に横穴式石室の調査が行われたことが知られているが詳細は不明である。近年には昭和57年度と平成22年度に墳丘測量が実施され、墳丘の現況については調査されてきた。しかしながら、周溝の状態についてはこれまで確認されておらず、畑の耕作等の影響など危惧されていることもあり、埋没している周溝の状況確認について必要性が生じてきた。

よって、第3号墳の周溝の範囲や保存状況を確認し、今後の保存活用に係る計画の資料とするため、調査を実施することとなった。また、隣接する第4号墳・第5号墳は、古墳であるか不明確であったことから、今回併せて周溝の有無について確認することとなった。

現況 第3号墳（前方後円墳） 本古墳は、舌状台地の平坦面西端に構築されており、主軸はN-77°-E、全長44.5m、前方部幅24m、後円部径24.5m、高さ5mを測る（昭和57年度測量結果による）。現状では、昭和57年度の測量時に確認された戦後の横穴式石室の調査痕跡は、ほとんどわからない状態である。墳丘には植木が育成されている。前方部には大木が生い茂っており、木の根による墳丘への影響が懸念される。墳丘の周囲は舗装道路や畑地などになっており、周溝の窺みは確認できない。今回調査した墳丘南側のくびれ部には水洗トイレが設置されており、浄化槽や基礎により周溝の一部が損壊している可能性がある。

第4号墳 長軸12mほどの南北に長い楕円形を呈する。高さは南西側から見て1.2mを測る。墳丘は人為的に改変されているように窺える。

第5号墳 長軸11.5 m、短軸7 mほどの南北に長い楕円形を呈する。高さは北側から見て1.1 mである。墳丘には樹木が生えており、人為的な墳丘の改変も窺える。

調査方法 第3号墳 後円部南側からくびれ部にかけての未利用地330㎡を調査対象地とした。その西側には土地管理者による作業用の水洗トイレが設置されている。土地管理者によると、この未利用地は過去に建造物が建築されていたとのことである。調査は、墳丘に直交するように設定したくびれ部側の1トレンチ、後円部側の2トレンチをバックホウにより掘り下げた。1トレンチは、幅1.1 m、長さ5.8 mとし、周溝堆積土が確認できる面まで掘り下げた。2トレンチは幅2 mを基本とし、周溝を確認できる面まで掘り下げ、トレンチの長さは周溝外縁部を確認した11.5 mとした。

第4号墳 墳丘南西側に幅0.5 m、長さ2.5 mのトレンチを設定し、人力により周溝確認面まで掘り下げた。

第5号墳 墳丘北東側に幅0.6 m、長さ3.5 mのトレンチを設定し、人力により周溝確認面まで掘り下げた。

遺構・遺物 第3号墳1トレンチ 現況面から深さ約1 m前後までは、建造物などの削平による攪乱層が認められた。遺構確認面までは1.2～1.4 mとしたが、暗褐色土の周溝堆積土を0.2～0.3 m程掘り下げている。ボーリング調査によると周溝底面までは、北側で遺構確認面から0.7 m低いあたりの標高46.94 m前後、南側で確認面から0.9 m以上深く、標高46.6 mよりも低いあたりが周溝底面と思われる。北側は内縁立ち上がり部の可能性もある。周溝堆積土は暗褐色土が主体となり、ローム粒や5～10mm程度のロームブロックが混入する。1トレンチでは明瞭なくびれ部の痕跡は確認できなかった。

第3号墳2トレンチ 現況面から0.6～1.1 mまでは、建造物などの削平による攪乱土である。攪乱土の一部は、周溝に堆積する暗褐色土に近似しているため、周溝堆積土を把握する作業は困難であったことから、一部周溝堆積土内まで掘り下げている。攪乱は、後円部の墳丘裾部のトレンチ北側まで及んでいるが、トレンチ北端部で旧表土やローム漸移層が遺存していることが確認できた。旧表土は厚さ15～20cm程度で、標高49.0～49.2 m付近に形成されているが、トレンチ北端から南側へ約3 mまでは、攪乱により削り出されたソフトローム層やハードローム層が露呈しており、墳丘裾部が大きく削られていることが明らかとなった。

周溝は、トレンチ北端から南側へ3 m離れた箇所で確認できた。周溝堆積土の暗褐色土が幅約6.7 mにわたり堆積しており、周溝外縁部は重機により一部削ってしまったが、北東－南西方向に延びていた。周溝の深さは確認できていないが、ボーリング調査から推定すると周溝中心部の確認面からは深さ約1.6 m下の標高46.3 m前後、周溝外縁部確認面からの深さは約1.9 m下の標高46.3 m前後になる。旧表土から周溝底面までの深さは2.9 m程に想定できる。なお、周溝の内縁側にあたる周溝堆積土を一部掘り下げたところ、上端幅1.20 m、下端幅0.45 mの逆台形を呈する掘り込みを確認した。2重周溝の内側周溝とも捉えられたが、掘り込んだ規模が小さいことから、後円部内縁立ち上がり部に設けられた周溝内土壌と判断した。掘削した範囲内では特に副葬品は確認されなかった。したがって、第3号墳の周溝幅は5.5 m前後と考えられる。さらに、その南側には、硬質のローム粒や5mm程度のロームブロックが広がる範囲を確認した。その周囲からは、直刀片や馬具片が出土したことから、周溝内土壌の可能性も考えられた。また、トレンチの土層断面を確認したところ、軟質砂岩片が認められ、木棺の裏込めに用いられた可能性もあることから、周溝が埋没したのちに掘り込まれた周溝内土壌と判断した。なお、直刀片は広範囲にわたって小破片に破碎し、点在していたことから、周溝内土壌の副葬品が攪乱により破碎し、点在したものと推定した。

以上の結果から、第3号墳は後円部周溝幅約5.5 m、旧表土からの深さ約2.9 mの大規模な周溝を備える前方後円墳であることが明らかとなった。

出土遺物は縄文土器4点・14.05 g、石器1点・0.22 g、土師器25点・181.99 g、須恵器9点・165.17 g、鉄製品9点（直刀片7点・99.58 g、鞘口金具1点・5.84 g、馬具片1点・17.44 g）、礫3点・147.74 gであった。1～3は同一個体の須恵器甕片である。外面は平行叩き、内面は横位のナデ調整が施される。色調は灰黄色を呈す。3は内縁部の周溝内土壌の堆積土上層から出土した。4は馬具片と思われる。鉄地金銅装の十字透心葉形鏡板と推定する。環には鉾が確認できる。6世紀後半～7世紀初頭の所産と思われる。5は直刀片である。錆化や劣化による剥離が著しい。重量は55.59 gを測るが、その他剥離した同一個体片と思われる破片が6点・43.99 gある。6は直刀の鞘口金具と思われる。幅は2.5cm、重量は5.84 gである。外面には樹枝状の付着物が認められ、内面には木質が遺存する。小破片のため図示していないが（図版8）、須恵器長脚高坏片もある。脚部下段部の破片と思われ、細い沈線の下に長方形透かし穴を有している。3方透かしの高坏と思われ、6世紀後葉の所産と考えられる。

第4号墳 周溝は、墳丘の南西側に設定したトレンチの南側で周溝の内縁立ち上がり部を確認できた。トレンチの上部厚さ30cm程に耕作土が認められ、その耕作範囲は墳丘裾まで及んでいることが明らかとなった。墳丘側の耕作土直下はローム漸移層である。確認した周溝幅は0.5 m程で、周溝全体幅は把握できなかったが、古墳であることが明らかとなった。おそらくは径15 m程度の円墳と考えられるが、墳丘裾は耕作による攪乱を受け、墳丘も大きく改変されている。

第5号墳 周溝は、墳丘の北東側に設定したトレンチのほぼ中央で確認できた。現況面からの深さ0.7 m、確認面での周溝幅2.3 mを測り、周溝堆積土は黒褐色土であった。墳丘の盛土はトレンチ内では確認できなかったが、トレンチ南側の深さ30cm程で厚さ15cm前後の旧表土が遺存していた。周溝外には旧表土は遺存していなかったが、周溝堆積土を被覆する新时期テフラ層は遺存していた。

以上の結果、古墳であることが明らかとなったが、おそらくは第4号墳と同規模の径15 m程度の円墳と考えられるが、立木の他、墳丘は大きく改変されている。

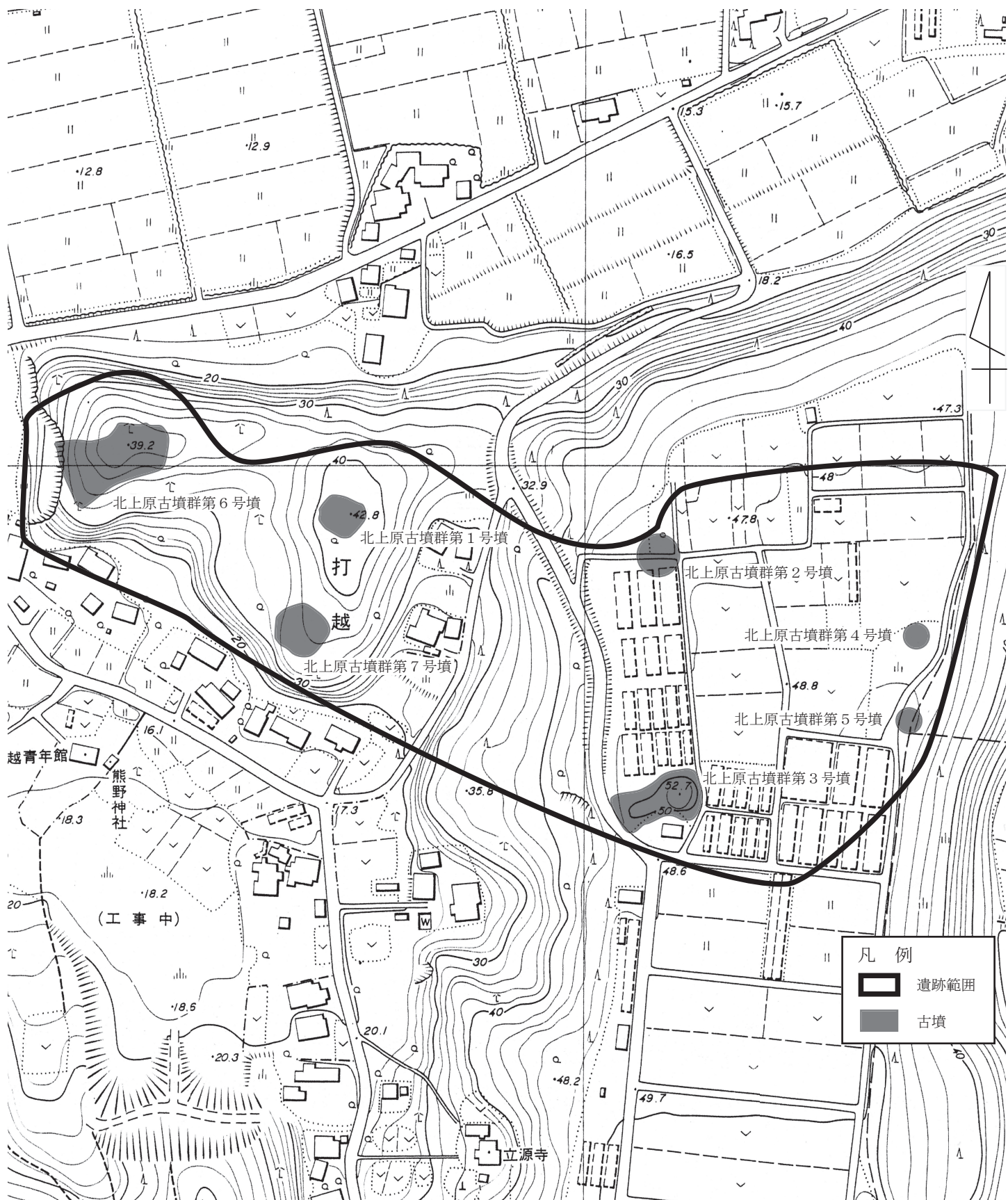
出土遺物は土師器4点・56.96 g、礫1点・634.38 gであった。

その他の遺物として、第2号墳の墳丘裾部に設けられている切り通しで出土した土師器器台を図示した。器台の受部から脚部が遺存しており、外面は縦位のミガキが施される。受部内面は横位のナデ調整である。

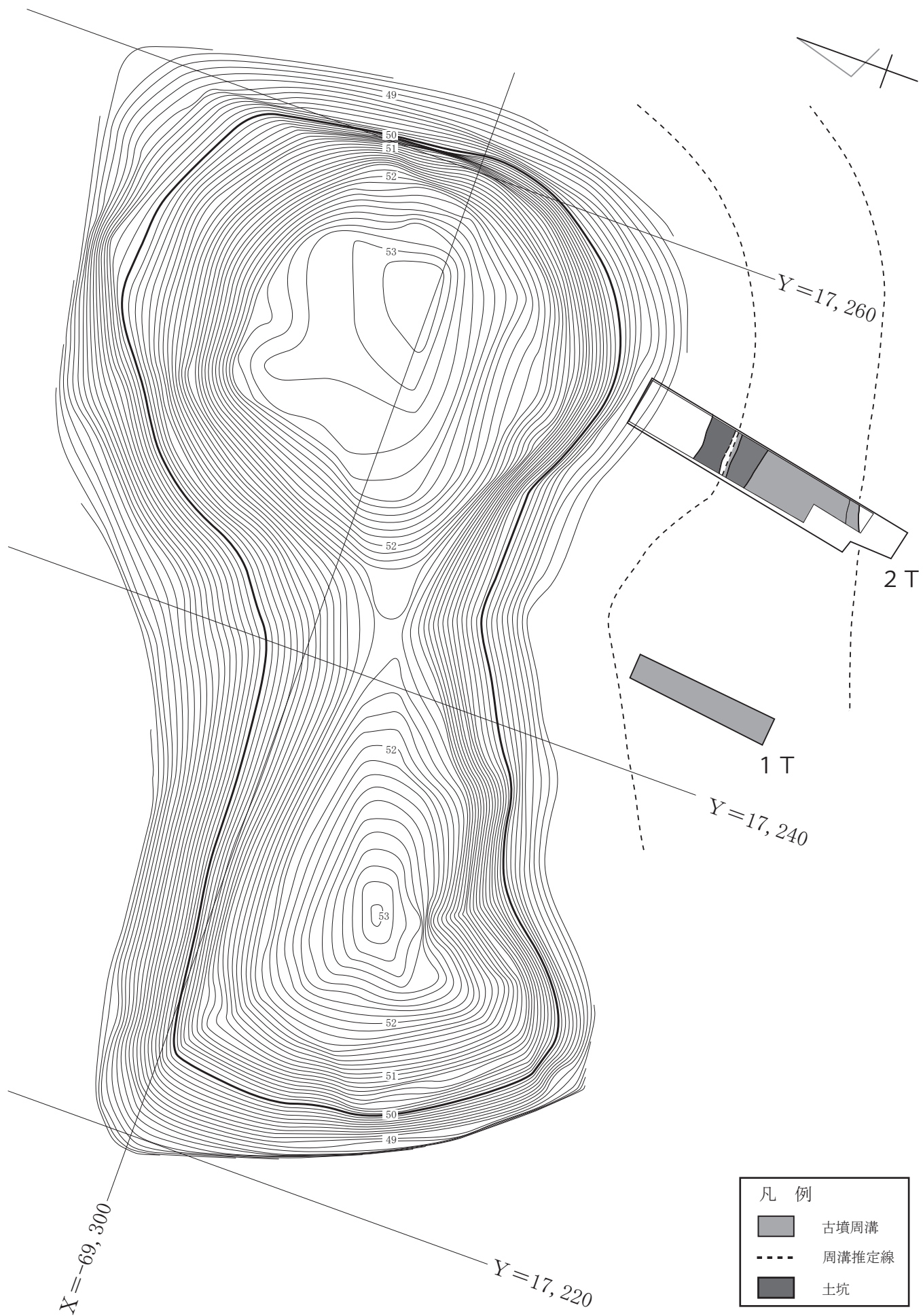
3. まとめ

今回の調査では、打越北上原古墳群の一端が明らかとなった。特に前方後円墳の第3号墳は埋葬施設として横穴式石室を内蔵し、後円部周溝幅5.5 m・深さ2.9 mに及ぶ大規模な周溝を備える古墳であることが判明した。さらに周溝内土壌周辺からは市内初の出土となる金銅装の馬具片も出土した。近隣で調査された前方後円墳の馬場作第1号墳は、全長約35 mの木棺直葬墳で、地山整形による墳丘構築や周溝の規模、副葬品の内容からしても打越北上原第3号墳の被葬者の優位性が窺え、小櫃川中～下流域に多数構築された古墳群の中でも最上位階層の被葬者が想定されるものである。今回の調査では周溝の形態まで把握できなかったが、2トレンチの周溝外縁部は北東－南西に延びていることから、盾形周溝を備える前方後円墳の可能性もある。時期については明確でないものの、小破片であるが、須恵器高坏片から6世紀後葉の築造と考えられ、当地域の首長墓として築造された祇園・長須賀古墳群との関わりが注目できよう。

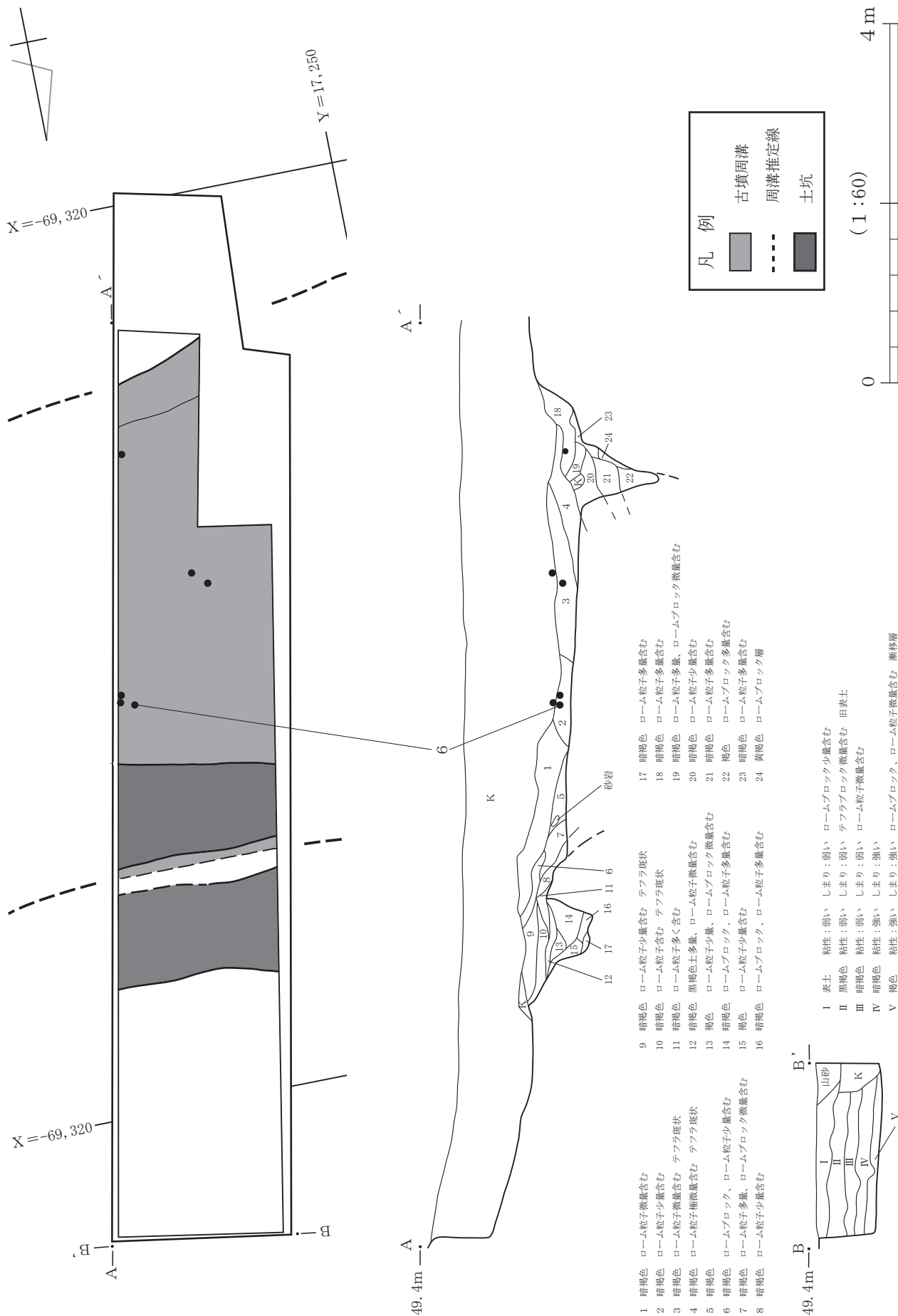
次に、第4・5号墳は古墳であることが明確となったが、時期は不明である。しかしながら、調査の実施された古墳を瞥見すると、TK 43～209 型式併行期の円墳が大半を占めており、おそらくは同時期の円墳と考えられるところである。いずれも保存状況が不良であることから、保存措置が留意される。



第8図 打越北上原古墳群周辺地形図 (S = 1 / 2,500)

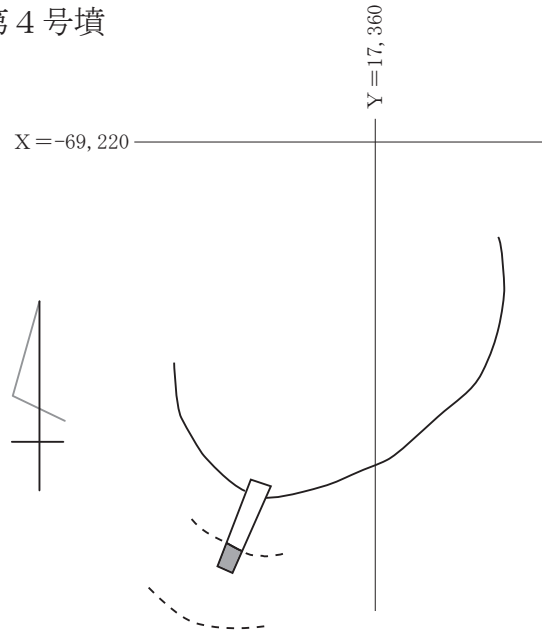


第9図 打越北上原第3号墳地形図 (S = 1 / 200)

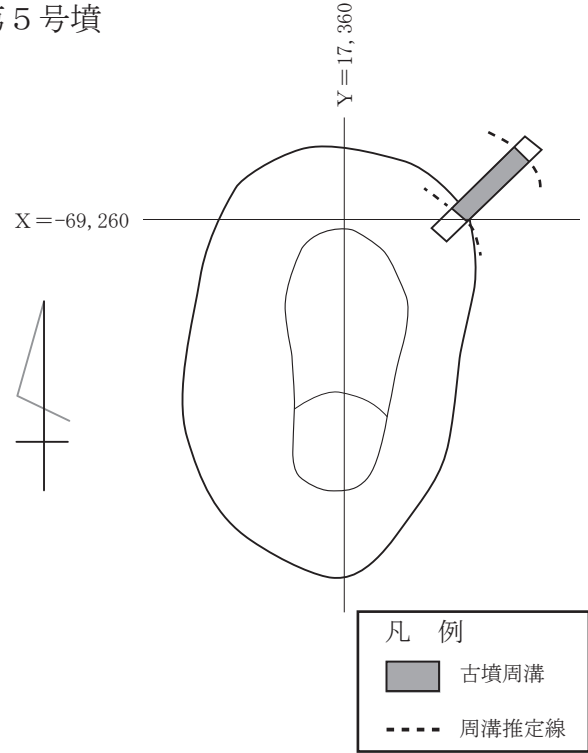


第10図 打越北上原第3号墳遺構確認状況図

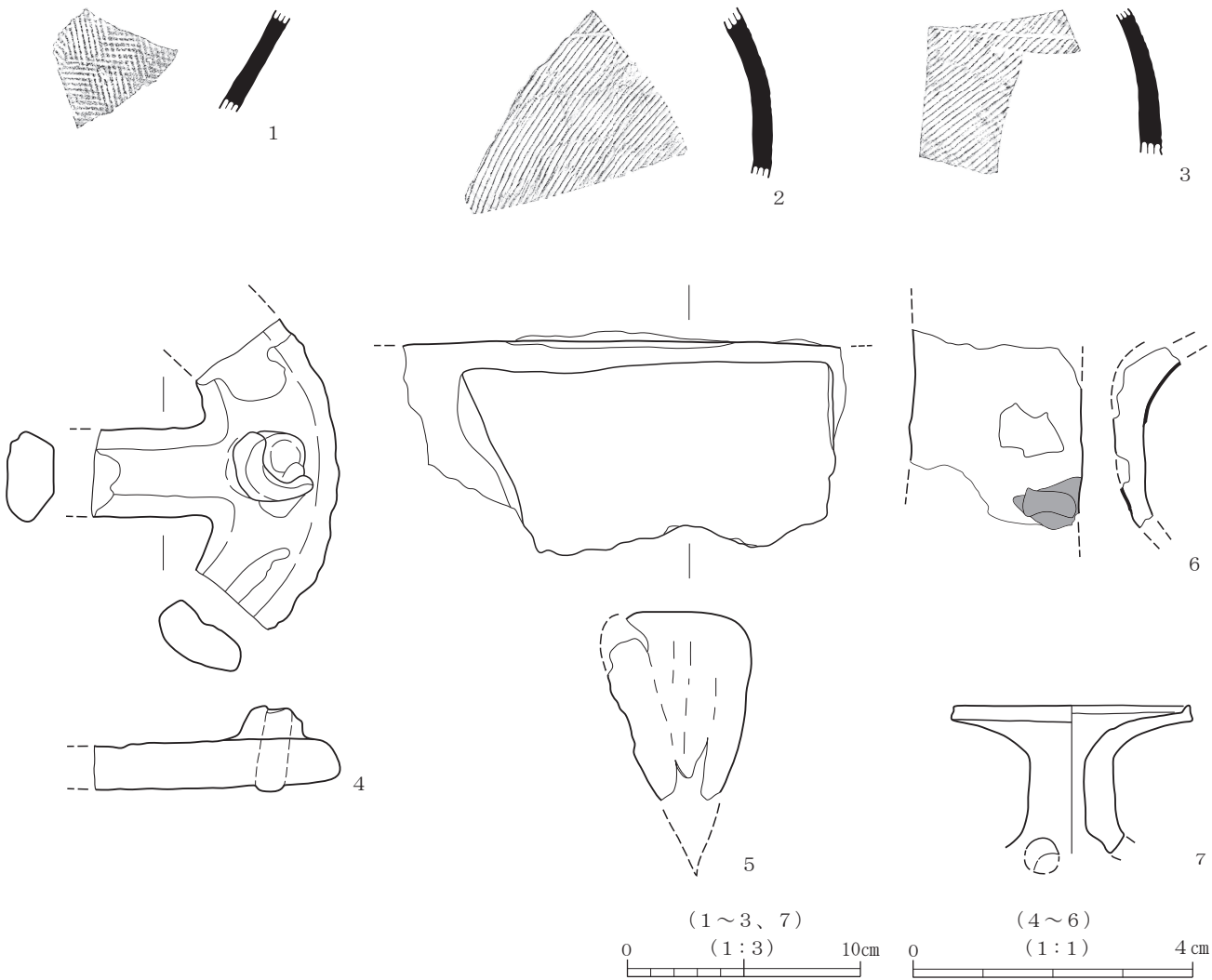
第4号墳



第5号墳



第11図 打越北上原第4号墳・第5号墳遺構確認状況図



第12図 打越北上原古墳群出土遺物実測図

第5章 宮ノ越貝塚

1. 周辺の遺跡と環境（第13図）

宮ノ越貝塚は、小櫃川下流域右岸の標高約29mの台地上に所在する。これまで正式な発掘調査は実施されていないが、昭和60年の圃場整備に伴う貝層の測量や表採資料の紹介により南北約75m、東西約65mの範囲に北側に開口する縄文時代中～後期の馬蹄形貝塚と推定されている。周辺に所在する西ノ窪遺跡、境No.2遺跡からは縄文時代後期前葉の遺構が検出され、また北側約1kmには、縄文時代後・晩期の拠点集落である山野貝塚が所在し、袖ヶ浦市内では縄文時代後・晩期の遺跡が最も集中する地域の1つである。

2. 調査と遺跡の概要（第14図）

調査目的 今回は、貝塚の遺存状況及び分布範囲を把握するとともに、本貝塚の内容を把握し、山野貝塚と比較するための貝層サンプルを採取することを目的として実施した。調査は公共座標に即した基準杭を打設し、表土除去には重機を用いた。なお、時間の制約上、本報告においては調査の概要について報告し、貝層サンプルの内容等の詳細については今後報告することとする。

調査範囲の基本層序及び遺構・遺物の分布 本調査範囲の基本層序は、上層より、Ⅰ．昭和60年の盛土（25～30cm）、Ⅱ．旧耕作土（10～15cm）、Ⅲ．近世以降と思われる造成土（30～60cm）、Ⅳ．遺物包含層・遺構覆土（約20cm）、Ⅴ．ソフトローム漸移層（5～10cm）、ソフトローム層となる。ソフトローム層で明確に遺構の有無が確認できたが、そこに至るまでの全層位から縄文土器を主体とする遺物が大量に出土したため、一部のトレンチ及びトレンチの一部のみソフトローム層まで掘り下げた。調査範囲北側では貝層が検出され、縄文時代中期後半～後期中葉の遺物が大量に出土し、後期後葉、晩期の遺物がごくわずかに認められた。一方、調査範囲南側では弥生時代後期～奈良・平安時代の遺物が比較的多く含まれ、わずかに中世の遺物も認められた。また、Ⅲ層を除去した段階で焼土や硬質面が検出され、さらにソフトローム面の大部分が硬質化していることから、大量に出土した遺物も考慮すると、弥生時代後期～奈良・平安時代にかけての住居が様々なレベルで複数存在していると推測される。

貝層の分布 貝層は調査範囲北側で検出されたが、昭和60年の測量結果に重ね合わせるといずれも貝層の南限に位置していることになる。ただし、両時期の分布範囲を比較すると、本調査の方が7mほど北側に位置する。貝層は盛土層直下で検出され上層の一部が耕作により破壊されていた。盛土後の耕作により本来の南端部の貝層は破壊されてしまった可能性も考えられる。なお、平成6・7年度に実施された根形台遺跡群の確認調査において宮ノ越貝塚周辺にもトレンチが設定されており、本調査範囲北側約80mに位置するK7トレンチからハマグリ、ツメタガイを主体とする貝層が検出された。現状でもその北側の畑の表面には貝の散布が確認できる。北東側から谷が入り込んでいることを考え合わせると、本貝塚は真北よりも北東に開口する馬蹄形貝塚である可能性が考えられる。

貝層の概要 確認面の貝層の多くは耕作時の攪乱を受けているが、貝層サンプル採取箇所の状況やボーリング調査から調査範囲の北側に面的に展開している可能性が高い。貝層サンプルは6トレンチ（Aサンプル）と17トレンチ（Bサンプル）で採取した。Aサンプルは40×40×5cm前後の単位で12カット採取した。貝層は厚さ約65cmで、上層はツメタガイ、シオフキ、ハマグリ、マテガイの破碎貝を主体とする混土貝層で、後期中葉加曽利B2式期の土器が比較的多く出土した（1～3）。なお、カット③～④にかけてイノシシの

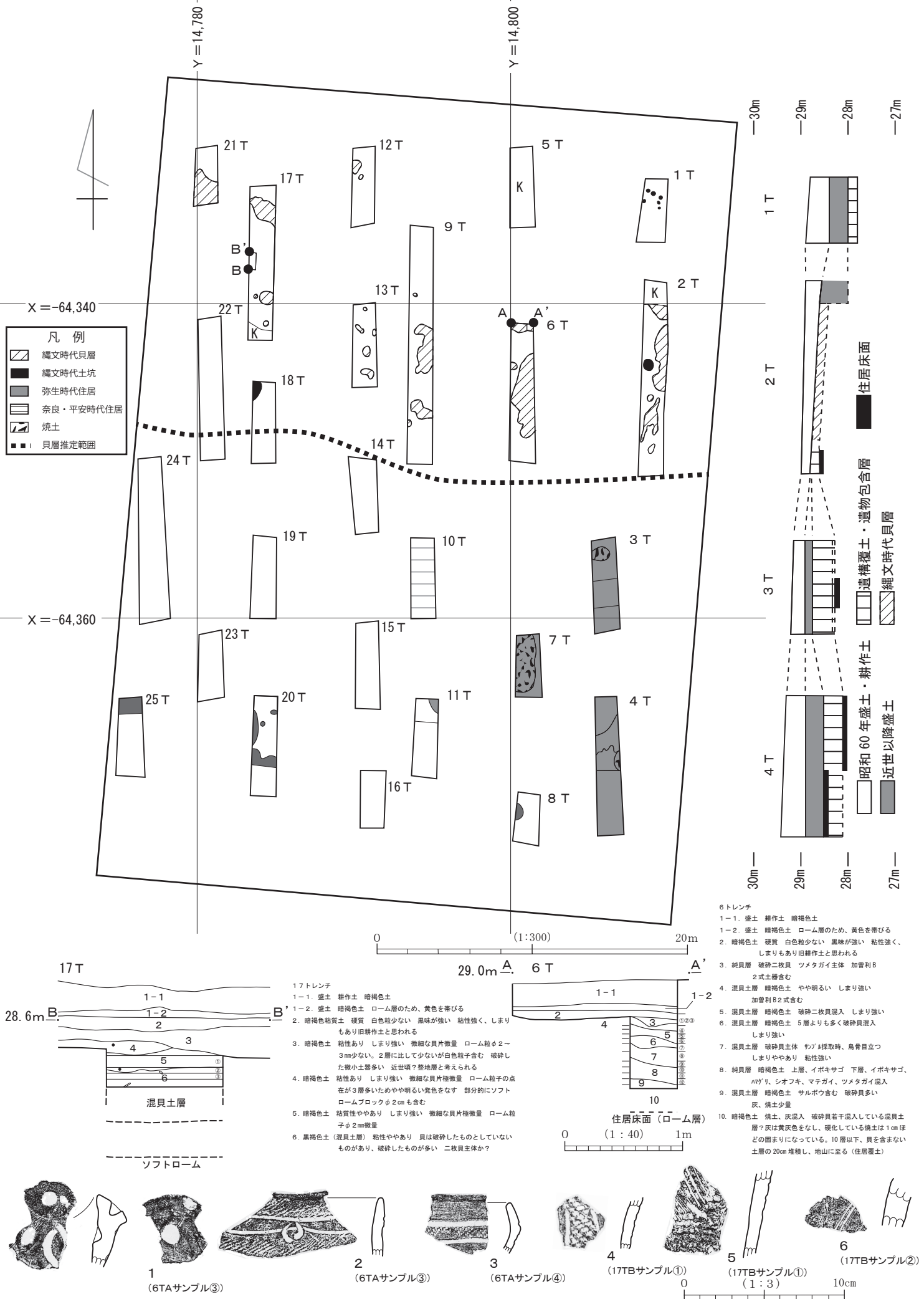
骨がまとまって検出された。中層はイボキサゴを主体とする混貝土層、下層はイボキサゴ、ハマグリ、シオフキを主体とする純貝層を含む。下層については比較的厚手の土器が出土したことから、加曽利B式期より古い可能性がある。Bサンプルは100×10×10cmおよび5cmの単位で3カット採取した。出土遺物から中期加曽利E式期～後期前葉堀之内式期の貝層と考えられる（4～6）。ハマグリ主体の混貝土層である。

3. まとめ

今回の調査により、宮ノ越貝塚の貝層が良好に残存しており、過去に実施された分布調査のとおり、本調査範囲の北半が貝層の南限であることが把握された。また、貝層が中期～後期にかけて形成された可能性を示す資料が得られた。今後貝層サンプル等の詳細な分析を行うことにより、宮ノ越貝塚の内容が明らかになるとともに、近隣に所在する山野貝塚との関係を考えていくことが可能になると思われる。



第13図 宮ノ越貝塚周辺地形図



第14図 宮ノ越貝塚遺構確認状況図、調査範囲断面模式図、出土遺物実測図